

# CONTENTS

- 2 放すべき理由 ..... イ・ヨンフン牧師
- 4 今日のマナ ..... チョウ・ヨンギ牧師
  - ・ 真の幸せの道
- 6 メッセージ ..... 志垣重政牧師
  - ・ 福音は靈的祝福の唯一なる鍵
- 10 特集 | 感謝 ..... ユン・ヨンソン牧師
  - ・ 365 日、感謝する人生の祝福
- 17 大きな絵でこの世を理解する ..... キム・ジョンチョル監督
  - ・ 第三神殿と終わりの時に關する兆し
- 24 靈的リーダーシップ ..... イ・ヨンフン牧師
  - ・ 仕えるリーダーシップ
- 28 私の人生、私の証 ..... ユン・チヨン牧師
  - ・ 刑務所という訓練所
- 35 企画 | 私たちの内に礼拝に対する渴きがあるのか .....
  - ・ 変異ディアスボラ時代の靈的訓練／チョ・ギュウナム牧師
- 41 レビ記ライフ ..... カン・デウィ牧師
  - ・ 「そして彼は呼んだ」（ヴァイクラー וְיִשְׁאַל）
- 46 狹き門、狭き道 ..... カン・サン牧師
  - ・ 誘惑と試練に打ち勝つ秘訣
- 50 統一時代を開く ..... ベン・トレイ理事長
  - ・ 預言の目的

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 2021 年 3 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

# 赦すべき理由

イ・ヨンフン牧師

マタイによる福音書18章に記されている1万タラントの負債のある者の物語は、私たちの人生をより大きな視点で照らし、「それでも赦さなければならない」と語っています。1万タラントの負債のある者は主人のあわれみにより、子供とすべての財産を売っても返すことのできない負債を免じてもらいました。

ところが、この者が出て行って、自分に少しの借金をしている者に会うと、彼をつかまえて借金を返せと言つて獄に入れてしまいます。この話を聞いた主人は怒って1万タラントの負債を免除したことを取り消し、同じように獄に閉じ込めてしまいました。

この話は、赦しが私と私に害を与えた者だけの問題ではないということを表しています。私と加害者の関



係の上に、私を絶えず赦してください神様との関係があります。私たちが赦すべき理由は、問題が解決したからでも、怒りが消えたからでも、いい人柄だからでもありません。私たちが赦すべき理由は、私たちがもっと大きなことを赦されたからです。そして、私たちを赦してください神様は、私たちが赦す人生を送ることを願っているからです。

現在、私たちは大変な困難な時期を過ごしています。そのためか、悔しくて腹が立つことがより多く起こるようです。私たちがその度に憎しみと恨みに心を奪われることなく、その状況から一歩退いて、いつも変わらず私たちを赦してください神様を見つめながら、その方に似た『赦しの心』で反応できるようになることを願います。†

## \* 今日のマナ



スカルという町の井戸端で、イエス様は一人の女性に会いました。その女性は、幸せを見つけるために夫を5度も替えました。今6番目の夫と住んでいますが、その女性の心の中に幸せはありませんでした。それをご存知である主は、「この水を飲む者はまた渴きますが、わたしが与える水を飲むと、永遠に渴くことがなく、その人のうちで生ける水がわきあがるであろう」と言われました。

ついに女性がイエス・キリストを救い主として受け入れ、神様のふところに抱かれると、その心には生ける水の川と幸せの泉が湧き出ました。そして、この女性は水がめを捨てて町へ走り、キリストの福音を宣べ伝えました。（ヨハネ4章）

人間は、神様なしに一瞬たりとも幸せに生きられません。醜くて捨てられて当然の私たちのために、神様はひとり子イエス・キリストを送ってくださいました。イエス様は人類の罪と不義と醜

チョウ・ヨンギ  
ヨイド純福音教会元老牧師



## 真の幸せの道

悪を一身に背負って、十字架に架かって血を流して死に、私たちの罪を清算されました。私たちは、このキリストの愛の中に入つて父のふところに抱かれるとき、初めて幸せを得ることができます。

神様のふところに抱かれると、私たちの生活は神様を愛する人生になり、私の隣人・自然・環境を愛する人生になります。また私たちが神様に愛と物質と体を捧げて生きていくとき、私たちの家はより豊かになり、この社会には愛と理解と関心が溢れるようになります。

私たちは幸せになるために、父なる神様の属性、すなわち、互いに与える生活をしなければなりません。他人が1マイルを行かせようとするなら2マイルを行き、上着を取ろうとするなら下着まで与える人生を生きるとき、私たちの心の中に真の幸福と喜びが満ち溢れます。†



## 福音は 靈的祝福の唯一なる鍵

—エペソ人への手紙 1章 3～14節—

ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神はキリストにあって、天上で靈のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福し、みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである。これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである。わたしたちは、御子にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。神はその恵みをさらに増し加えて、あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり、御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである。それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。わたしたちは、御旨の欲するままにすべての事をなさるかたの目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである。それは、早くからキリストに望みをおいでいるわたしたちが、神の

私たちは神の所有、資産ですから、私たちがつまづくことは、神の損失を意味します。神が放って置かれるはずはありません。必ず、皆さん的人生に介入してくださいます。

栄光をほめたたえる者となるためである。あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖靈の証印をおされたのである。この聖靈は、わたしたちが神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあがなわれ、神の栄光をほめたたえるに至るためである。

AD53年頃、パウロは第三次宣教旅行の途上、ニューローマと呼ばれていた地域の首都であるエペソに2年半滞在しました。「それが二年間も続いたので、アジアに住んでいる者は、ユダヤ人もギリシャ人も皆、主の言を聞いた。」（使徒 19:10）迷信と偶像礼拝の中心であった町が、福音の都市として生まれ変わったのです。パウロが伝えた福音、エペソの人々が受け容れた福音とは何だったのでしょうか。

第一は、父なる神が私たちを創世の前から選んでくださったことです。「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、

御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである。」(エペソ 1:4～5) 私たちが神を選んだのではなく、神が私たちを予め神の子どもとして定めてくださったのです。私たちは、偶然に導かれたのではなく、その計画通りに神の御前に導かれたのです。すべてが神の靈、すなわち、聖靈による導きだったのです。皆さんの身分は元々『神の子ども』『天国の市民』です。

「これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである。」(エペソ 1:6) そうでなければ、救いは行いによるものになってしまいます。自らの選択であれば、感動も感謝もないはずです。救いは神の選択です。だからこそ、私たちは喜びを感じるのです。神に選んでいただいたことは、靈的祝福の最たることなのです。

第二は、私たちは御子イエス・キリストの十字架の功労で贖われた者であることです。「わたしたちは、御子にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。」(エペソ 1:7) 『贖い』とはRedemption、すなわち、代価を支払って、奴隸を解放し、自由にすることを表します。主が十字架上で『すべてを成し遂げた』と宣言され、息を引き取りました。原語はギリシャ語で『テテレスタイ』と記録されています。すべての代価を支払ったという意味です。主はご自身の血潮の代価で私たちを悪魔の奴隸的身分から解放してくださり、その上、神の子としてくださったのです。「しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。」(ヨハネ 1:12)

そして、神の子となった私たちに神の国の秘密まで教えてくださいました。「神はその恵みをさらに増し加えて、あらゆる知恵

と悟りとをわたしたちに賜わり、御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである。」(エペソ 1:8～9) 「わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。」(ヨハネ 15:15)

皆さんは、この特権を考えたことがあるでしょうか。恵み以外の何ものでもありません。人は秘密を知ったら、そのことを話さずにはいられないはずです。そして、この秘密は積極的に伝えるべき福音なのです。

第三は、聖靈による証印を押されたことです。「あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖靈の証印をおされたのである。」(エペソ 1:13) 証印とは所有権の確認を表します。救いの福音を聞き、救い主を受け容れた瞬間、聖靈が神の所有印を押してくださったのです。私たちは神の所有、資産ですから、私たちがつまずくことは、神の損失を意味します。神が放って置かれるはずはありません。必ず、皆さんの人生に介入してくださいます。

「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、『恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。』」(イザヤ 43:1)

聖靈は衣食住を含めた私たちの人生の保証人なのです。問題がなくなるわけではありません。しかし、最高の保証人である聖靈が共におられることを信じる皆さんでありますように。†

毎日「感謝 365 日」を実践しているユン・ヨンソン牧師の家族



すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。(イテサロニケ 5:18)

聖書の知識や奇跡の体験がどれほど多くても、心に感謝がなければ、真のキリスト者とはいえないでしょう。キリスト者とは、神様に感謝することで、神様に栄光を捧げる人生を送る人々のことだからです。



## 365 日、感謝する人生の祝福

「結婚して子どもが生まれたら、必ず純福音で育てたいです。」当時、神学生だったユン・ヨンソン青年は、心の中で夢を描いて祈っていました。贊美チーム『靈山シンガーズ』で活動している間、よく見かけた子ども合唱団に感じるものがあったからです。子どもたちが純粋な心で賛美する姿は、とてもきれいで感動的でした。この子どもたちのように純福音という垣根の中で育てれば、間違いなく私の子どもも善良で信仰のある子になるだろうと思ったのです。

このような夢と考えは種となり、実を結びました。神学校卒業後の教育伝道師時代のことです。結婚する雰囲気もなく、何も準備していなかったのに、良い姉妹が現れてすぐに結婚が決まりました。すべてが難しいといわれる結婚問題がすらすらと解決し、ユン牧師は今でも「神様の特別な恵み」だと感じています。ユン牧師の口からは、祈るたびに感謝が自然に出てくるといいます。

### 神様からのびっくりプレゼント

神様は、ユン牧師の新婚家庭に「びっくりプレゼント」を与えられました。それは双子で、それも自然妊娠による双子の女の子でした。想像すらできなかった、これ以上にすばらしいことはない祝福でした。

「一卵性双生児で、それぞれ 1,900 g と 1,700 g で生まれました。子どもの名前はジュンヒ、ビヒです。3 分差でビヒが妹です」

双子の母親であるクム・スヨンさんは、「ジュンヒとビヒの名前には、イエス様の再臨を『準備』するという意味があり、夫が名付けました。聖徒ならイエス様の再臨を準備する心で信仰生活をしなければならないと思ったのです」と、昨日のことのように語ります。

「超音波検査で白い影が2つ見えました。生まれて初めて見るその映像は、私に強烈に迫ってきました。『生命の神秘さ、神様が与えられ生命、これよりも尊いものがあるだろうか』という思いに、私はときめき、胸が躍りました。あの時に感じた心は聖霊様からいただいたものだと信じています」

双子は何か急いでいたのか、妊娠7ヶ月で陣痛が来ました。分娩室に入ったとき、早産に皆が心配していましたが、ユン牧師は神様の導きを感じており、まずは感謝の祈りを捧げました。

無事に出産を終えてから、医者は『お腹が大きくなりすぎると、お母さんが大変だと思って子どもたちは早く出てきてくれました。ハハ！』と語りました。二人とも保育器の世話にはならず、21日で退院となりました。早産で心配することではなく、かえって感謝することになりました。ハレルヤ！！

### 双子は信仰継承の三代目

ユン牧師の母親は、ブチョンにある純福音第一教会のアン・ジョンレ牧師です。クム牧師婦人の母、キム・ジョンスク執事は、20年近くヨイド純福音教会の中等部の教師として仕えてきました。このように信仰の中で育った男女が家庭を築き、二児の父親と母親になりました。三代目のジュンヒとビヒの双子の娘を、両親よりも真実な信仰者に育てることが夫婦の課題となっています。ユン牧師には、幼い頃から母と一緒に捧げた家庭礼拝の良い思い出があります。

「幼い頃、母は家庭礼拝を1時間半ほどしていました。礼拝の途中で眠ってしまったときは、僕たちを抱きしめて祈ってくれました。今でもその温もりを覚えています」

両親から受け継いだ信仰の遺産を子どもにも受け継がせたい心で、夫婦は毎週土曜日の夕方に家庭礼拝を捧げています。

「ジュンヒとビヒのありがたいことは、パパとママと一緒に礼拝することに不平を言わず喜んで従うことです。私も母が祈ってくれたように、子どもたちを抱きながら毎日祈っています」

「私たち夫婦に、なぜこのようなプレゼントが与えられたのか」と考えるたびに、夫婦は感謝の気持ちに満たされます。

### 娘が可愛くてしかたがない親に来た試練

このような幸せを妬んだかのような試練が訪れました。長女のジュンヒがアトピーになったのです。かわいらしい盛りの年頃に、ひどいアトピーで苦しんでいる5歳の娘を見ていたら、母親の胸は潰れ、涙が出ました。アトピーがある子どもを持つ親なら誰もが避けられないひどい苦しみです。有名な皮膚科にいくら通っても治りませんでした。評判の良い病院を訪れ、鍼を打たせたり、漢方薬を飲ませたりもしました。一時的に効果はあったのですが、再発しました。

それから2年の歳月が流れました。クム・スヨン牧師婦人はあらゆる方法を尽くしても治療がなかなか成果を結ばず、心身ともに疲れ果てていき、主の働きで忙しい夫に対する不満も少しづつ積もっていました。仲睦まじい夫婦にも、コミュニケーションの断絶という危機が訪れたのです。

「家族全員が大変な試練にいました。ジュンヒはかゆくて眠れないからつらいし、ビヒは母親がお姉さんにつきっきりのために寂しい思いをしていました。私は教役者として仕事が忙しく、妻

を助けることができずつらいし、妻は二人の娘を連れて病院に通うのに精一杯で、心に余裕がありませんでした。妻が疲れ果てるほど、夫婦間のコミュニケーションがなくなるのが一番大きな問題でした」

双子の母は、「当時、キンポで暮らしながらヨイドまで往復していたので、心身ともに疲れ果てていました。しかも、アトピーのせいで落ち込んでいるから話す気にもなれず、顔の表情には精神状態がそのまま出てしまっていました。それでお互いに誤解が生じていました」と、当時を振り返って語ります。

### 癒してくださることを信じて前もって捧げた感謝の祈り

さまざまな理由から事態が悪化するだけで、人間的には解決の糸口すら見つかずの状況でしたが、ウン牧師はただ祈りました。

「神様、感謝します。神様が愛する娘ジュンヒを一日でも早くいやしてください。いやしてくださることを信じて、改めて感謝します。足りない私たちはこの試練の意味がよくわかりません。しかし、神様が私たち家族を善良な道へ導いてくださることを信じます」

ある日、意外なところから祈りの答えが与えられたのです。双子が7歳になった2017年、神様の導きにより、二人の娘はヨイド純福音教会の子ども合唱団『エンジェルス合唱団』に入団することになりました。15年前、ウン牧師が神学生時代に出会ったのは、他ならぬこの児童合唱団でした（エンジェルス合唱団はのちにドリーマークワイアに改名）。以前に夢見たことがとうとう現実になったのです。ウン牧師夫妻は、これが神様の恵みであることを悟り、改めて感謝の祈りを捧げました。

「神様がエンジェルス合唱団に会わせてくださったのは、二人の娘のためだけではありませんでした。むしろ、私たち夫婦が祝

福を受けました。合唱団には『母子の祈り会』があり、妻がそこに参加するようになってから、すべてが解決したのです。神様が私たち夫婦のことを哀れんでくださり、祈る共同体に案内されたのだ信じています」と、ウン牧師は話します。

クム・スヨン牧師婦人は、「子どもたちが賛美の練習をする間、祈り会の集まりがあり、そこではとりなしの祈りをしていました。そこで一緒に悲しんでくれる仲間に出会ったことが私には大きな慰めとなりました。そして、私たち夫婦も一緒に悔い改め、断食の祈りをするようになったのです。すると、心の中のわだかまりがすべて溶け、お互いへの信頼が回復しました。そして、合唱団に入ってから、長女ジュンヒのアトピーも少しづつよくなりました。すべてが感謝です」と語りました。

### 幼い娘の信仰と神様の祝福

神様の祝福はそれだけで終わりませんでした。2018年1月に実施されたイ・ヨンフン牧師のアメリカ宣教旅行に、児童合唱団ドリーマークワイアが同行することになりました。志願者だけが行く旅行でしたので、夫婦は自分たちには関係のことだと思っていましたが、そうではありませんでした。なぜか長女のジュンヒがまだアトピーも治っていないのに行きたいとせがんだのです。どう考えても容易なことではありません。ところが、祈れば祈るほどジュンヒの切なる願いが脳裏に浮かぶのです。結局、父とビヒは家に残って、母とジュンヒが行くことになりました。

アメリカのアトランタ宣教旅行に同行したクム・スヨン牧師婦人は、「ジュンヒが宣教旅行をとても行きたがりました。どれほど熱心なのか、アメリカで歌う英語の賛美曲をすぐに暗記したほどでした。長時間の飛行と移動で、8歳の子どもには厳しい日程にもかかわらず、よく耐えました。その幼い信仰に神様が答えて

くださったのでしょうか」と話しました。

長距離旅行にもかかわらず、ジュンヒのアトピー症状はひどくならず、むしろ、帰国後はさらによくなりました。それから一ヶ月後にジュンヒの口からこのような告白がありました。

「お母さん、もう痒くない。神様が治してくれました」

愛する娘の完治の知らせを聞いたとき、夫婦は言葉では言い表せない幸福感に満たされました。これまでの苦しみと痛みが一瞬ですべてなくなり、報いをいただいた感じでした。その夜、夫婦が神様に捧げた感謝の祈りは、最も美しい信仰告白となりました。

### 365日、感謝する人生のための「感謝の書き込み」

この時からユン牧師の家族は「感謝する人生」を実践しています。最近のユン牧師は、早天礼拝後に書籍『感謝から始まる365』を読みながら、「私の感謝」を書いています。

一方、ジュンヒとビヒはすでにかなり前から「感謝の書き込み」を実践しています。

「ジュンヒとビヒは7歳のときから感謝帳を書き始めました。字が書けない間は、子供たちに何が感謝なのかと聞いて、お母さんが代わりに書いてくれました。それで感謝帳を書くために感謝なことを探すようになりました」

最近のジュンヒとビヒは、感謝帳に『公文をよく解けるようにしてください、感謝します（ジュンヒ）』『おばあさんと一緒に礼拝を捧げられるようにしてください、感謝します（ビヒ）』と書いています。

ユン・ヨンソンとクム・スヨンの牧師夫妻は、今日も子どもたちとともに「365日、感謝する人生の祝福」を享受し、「私の感謝の書き込み」を実践しています。†

\* 大きな絵でこの世を理解する

## 第三神殿と終わりの時にに関する兆し



| キム・ジョンチョル | www.bradtv.net

### 神殿復元は一生の使命

イスラエルにはソロモンが建てた神殿を復元することを一生の使命として考えている人々がいます。

彼らがエルサレムに建設しようとする新たな神殿がまさに「第三神殿」です。神殿建築のための70人のユダヤ人代表は、月に一度集まって会議をし、各分野の専門家たちは一週間に一回集まって、具体的な事項を議論するといいます。

エルサレムの中央バスター・ミナルの向かい側にある住宅街に位置する建物には、白いひげを伸ばして黒の服を着た伝統的なユダヤ人が10人ほど出入りしているのを見ることができます。彼らが「第三神殿」建設のために立ち上げられたサンヘドリン実務チームです。筆者がサンヘドリンの許諾を受けて尋ねたとき、彼らはビームプロジェクトで壁一面に映し出された神殿の設計図を見ながら、一生懸命議論しているところでした。

それでは、彼らが準備している「第三神殿」とは何であり、私たちクリスチャンにはどのような意味があるのでしょうか？

### 第一神殿と第二神殿

約3千年前に、ダビデ王は神殿建築を切に願いましたが、その願いはかなわず、息子に遺言を残しました。息子のソロモンは強い国力を土台として、ダビデ王が準備して設計してくれた通り、神殿建築を見事に完成しました。この神殿を最初に建てた神殿という意味で「第一神殿」と呼び、その位置は、アブラハムがイサクを生贊として捧げようとしたモリヤ山です。

その後バビロンがユダを侵略して滅亡させたときに、彼らはユダの民を捕虜として連れて行き、第一神殿も破壊しました。捕虜生活70年が経った後、ペルシャ王クロスはユダヤ人に捕虜帰還命令を下し、故国に帰ってきたユダヤ人たちは、ゼルバベルを中心として神殿を新たに建設しました。これが「第二神殿」です。もちろん、後にヘロデ王がこの神殿を再建しますが、その神殿も「第二神殿」として含まれます。

### 「その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」

イエス様は第二神殿が「石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」（マタイ24:2後半）と預言されました。実際に、約40年後に（A.D.73年）、エルサレムは世界最強のローマ軍の攻撃で廃墟となり、神殿も完全に破壊されてしまいます。学者たちの研究によると、「その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」というイエスの預言が文字通り正確に成就されたと言います。

その時から今まで、エルサレムにユダヤ人の神殿は存在するこ



第三神殿で使用する楽器を作る名人たち

とも再建することもできなかったのです。ローマの迫害を受けて、ユダヤ人たちは全世界へバラバラに散らばるようになり、2千年の間にディアスポラの生活を送るようになったのです。日本による植民地時代を経験した私たちの歴史と比較すると、2千年の間、国土を奪われたユダヤ人たちの悲しみと切なさがどれほど大きくて深いのか、想像できると思います。

全世界に散らばって住んでいたユダヤ人たちは、いつもイスラエルに戻ることを願いました。その主な理由の一つは、エルサレムのモリヤ山に神殿を再建築するためでした。彼らに対して神殿がどのような意味を持っているので、そのように長い間神殿建築の夢をあきらめなかつたのでしょうか？

私たちクリスチャンには理解できないことですが、ユダヤ人たちはヨハネの福音書3章16～17節の御言葉を認めていません。つまり、イエスが神のひとり子であり、この世界の救い主であることを信じていないのです。彼らはまだ、旧約聖書だけを信じているので、神様から罪の赦しを受けることができる方法は、旧約時代のように、ただ神殿で動物の生贊を捧げなければならないと考え、そのためには、必ず神殿が再び建設されるべきだと考えています。



### 第三神殿建築に対する確信と準備作業

1948年、ついにユダヤ人たちはイスラエルを建国することに成功し、世界に散らばって住んでいたユダヤ人たちが続々とイスラエルの地に戻ってきました。そして、この頃から本格的に神殿建築を準備し始めたのです。

しかし、これらの計画には解決できない障害物があります。旧約聖書で神がモリヤ山だけに建築することを命令されたので、ユダヤ人たちは、必ずその場所を取り戻す必要がありますが、2千年前にローマによって破壊された神殿の場所にはすでに、イスラムの聖地である岩のドームが建てられているからです。イスラム側としては、その場を譲るということは絶対に不可能なことです。

ユダヤ人たちはすぐにでも第三神殿を建築したかったのですが、現実はそうではなかったのです。しかし彼らは、神殿を再建する日が必ず来ると信じて、まずは万全な備えをしておくことを考えました。

彼らの第三神殿建築に対する計画は非常に実際的です。設計図を既に完成しておいただけでなく、エルサレムの新都市計画も準

備しています。現在、エルサレムの人口が約100万人程度ですが、神殿が建設された場合、その人口は約300万人に増えることを予想し、全世界から神殿での礼拝に参加するために訪れるユダヤ人の数は約700万人程度になると予想しています。また、彼らが一時的に居住できるように、都市システムを再編する対策も具体的に準備しています。

彼らは、第三神殿建築を開始されれば一年以内に完工できるであろうと主張しています。そして神殿が完成した後、神殿でいけにえを捧げるときに必要な祭司たちも訓練し、それに必要なあらゆる器具もすでに製作済みです。もちろん、このような準備作業は、一部は公開されていますが、敏感な事項に対しては緊密に作業しているのです。

筆者は、その現場を直接訪ね、各分野の担当者に会い、またカメラにも収めました。彼らはすべてが組織的であり、なおかつ実際的に動いていました。そして一様に、まもなく神殿建築は始まるようになると、確信に満ちていました。

### 第三神殿が私たちクリスチヤンに与える意味

それでは私たちクリスチヤンにとって、第三神殿はどういう意味を持つでしょうか。復活されて昇天を目前にしているイエス様は、ゲッセマネの園で弟子たちに質問します。

「あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか。」（マタイ 24:3）

その時、イエス様は答えます。

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。」（マタイ 24:15～16）

すべての神学者たちが同意するわけではないですが、一部の神

学者たちの話によれば、ここで「荒らす憎むべき者」とは、反キリストを言うものであり、「聖なる場所」とは、まさに神殿を示します。反キリストの登場は、終わりの時代が到来したことを意味し、そのために、まず、エルサレムに神殿が建てられていなければならぬというのです。

まだエルサレムに神殿の建設が開始されていませんが、ユダヤ人たちがあの第三神殿を建設するために準備をしているので、いつかは必ずエルサレムに神殿が建設されると予想できます。ここで私たちが心に留めておくべきことは、イエス様が言われた世の終わりに起こる重要な兆しの一つが、まさに第三神殿建築であるということです。

### モリヤ山の岩のドーム問題の解決方法は？

しかし、問題は岩のドームです。現実的にモリヤ山にある、イスラムの聖地である岩のドームが簡単に消えるということは無理に近いです。それはほとんど可能性がないといつても間違いありません。したら、第三神殿は建築されず、反キリストも登場せず、世の終わりという言葉は成り立たないのでしょうか？少なくとも今までそう見なされました。

しかし、新たな変数が発生します。エルサレムで一生涯を神殿の位置だけに注目し研究してきた考古学者カウフマンの主張によると、神殿の正確な位置は、岩のドームが建ててあるその場ではなく、岩のドームから北西に約 100 メートル離れたところだというのです。第三神殿建築を準備しているサンヘドリンは、この主張を受け入れて励まされつつあります。あえて岩のドームの場所にこだわらずに、その横に並んでユダヤ人の神殿を建設するという話が念頭に置かれています。モリヤ山の半分は、異邦人、つまり、ムスリムと共に使用するということです。

これはまさに「それから、わたしはつえのような測りざおを与えて、こう命じられた、『さあ立って、神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々とを、測りなさい。聖所の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だから。彼らは、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう。』」（黙示録 11:1-2）という御言葉と関連しています。

今は、ユダヤ人の第三神殿の建設は、戦争や強制ではなく、政治的な問題で解決することができるようになりました。岩のドームの敷地の権利を持っているパレスチナのワクフ団体との対話を通じて、モリヤ山の一部を割り当てられるとしたら、第三神殿の建築も全く不可能なことではないということです。

### 終わりの時に關する兆し

一部のクリスチヤンは、「ユダヤ人たちが、建築しようとする第三神殿が私たちとどういう関連があり、何の意味があるのですか？第三神殿は建築されるはずがありません」と主張する人もいます。もちろん、そのようなことがいつ目の前に現れ、ニュースで接することになるかは誰もわかりませんが、それにもかかわらず、現在イスラエルのエルサレムでは、実際に第三神殿を準備している人々が存在しているのは明らかな事実です。

彼らの神殿建築に対する信念がさらに深くなり、より具体的に明らかになっている今のエルサレムの状況を理解するのであれば、望んでいるかいないかにかかわらず、私たちは、確かにイエス様が言われた終わりの時に起こる様々な兆しを、一つずつ目撃しながら生きていくようになることは否定することができないでしょう。†



## 仕えるリーダーシップ



### ソソピョン

ドイツ系アメリカ人宣教師として朝鮮のために自分のすべてを差し出したソソピョン宣教師の人生を綴ったドキュメンタリー映画『ソソピョン、ゆっくり平穏に——』のポスター

ドイツ系アメリカ人の医療宣教師として1912年、単身で朝鮮の地を踏んだソ・ソピョン（本名：Elisabeth Johanna Shepping、1880.9.26.～1934.6.26）宣教師は、生涯仕えと献身の生活を実践しました。

病人を世話し、学校を建て、孤児14人を養子にし、見捨てられて行き場のない38人の女性を引取り一緒に住みました。さらに、誰もが嫌がるハンセン病患者も誠意をもって世話をしました。

彼女は黄色く色あせたチョゴリと黒いスカートを履き、男物のゴム靴を履いていつも麦飯と味噌汁で食事を済ませていました。生涯を終える前にその遺体さえも医科大学に解剖用に寄贈しました。彼女の葬儀は光州（クァンジュ）初の社会葬として執り行われ、多くの乞食とハンセン病患者が「お母さん！お母さん！」と号泣しながら棺の輿について歩いたそうです。

当時、東亜日報（トンアイルボ）は「慈善と教育事業に一生を捧げた貧民の母、ソ・ソピョンさん逝去」というタイトルで、彼女の死を報じました。彼女の死因は栄養失調であり、彼女が残したもののは小さな毛布1枚、小銭数枚、トウモロコシ粉2合だけでした。

そして、彼女のベッドの上には彼女の人生をよく代弁している次の文言が掛かっていました。「成功ではなく、仕えである。」  
"Not success, but service."

### イエス様の仕え

イエス様は、生涯仕えの人生を生きられました。さらに、過越の前日には僕の姿で自ら弟子たちの足を洗いました。これはすべての人のための贖いとして、自らを差し出してくださった十字架の偉大なる仕えを、予め示したのです。

愛は仕えの服を着るとき、心から心に伝わるようになります。また、仕えは飾り気ではなく真実の愛で行うとき、美しい香りを放つようになります。

イエス様が弟子たちの足を洗ってくださったことには、弟子たちへの愛の心だけでなく、仕えるリーダーシップを教える目的もありました。イエス様は弟子たちに直接仕える手本を見せることにより、彼らも仕えるリーダーになることを願われたのです。

イエス様の仕えの手本に従った初代教会の代表的な人物とし

て、エパフロデトを挙げることができます。彼はローマの監獄に投獄されたパウロを支援するために派遣されたピリピ教会の聖徒でした。彼は自分の身体を顧みず、どれほど献身的にパウロに仕えたのか、病気になり生死の岐路に立たされたこともあります。

誰かに仕える行動は、それ自体が美しい輝きを放つ宝石のようです。しかし、それが本当に価値のある理由は、愛で行う仕えが誰かの心を動かす力を持っているからです。キャンドルの炎が一つのキャンドルから他のキャンドルに移され、暗いところを明るく照らすように、仕えは別の仕えを生み、世の中を美しく変化させる源になります。

人は誰もが他人に仕えるよりも仕えてもらいたいものです。本能的に自分を世の中の中心におきたいという気持ちがあるからです。というわけで、仕えを実践することは言葉で表すよりも容易ではありません。しかし、イエス様に従う弟子であれば、自分を表に立たせる自己中心的考え方を捨て、他人に仕える者になるべきです。イエス・キリストを主として仕える人はイエス様の心、すなわち、僕の心を抱くようになります。僕の心を持つ時、善なる真実の心で喜んで、他の人に仕えることができます。

## しもべの心

使徒パウロは、キリストの心を抱いた忠実な働き者であり、靈的リーダーでした。彼は福音を伝える使命を果たすために、投獄もいとわなかったのです。それだけでなく、監獄でピリピ教会の聖徒たちに送った手紙では、彼らのためになら自分を灌祭に捧げても、すなわち、供え物の上に注がれる葡萄酒のように自分の命を捧げても喜びだと告白しました。

「そして、たとい、あなたがたの信仰の供え物をささげる祭壇

に、わたしの血をそそぐことがあっても、わたしは喜ぼう。あなたがた一同と共に喜ぼう。」(ピリピ 2:17)。

キリストの心を抱いた者たちは、イエス様のように、使徒パウロのように、僕の心で他の人に仕える靈的なリーダーの使命を十分に果たします。

人々は、力がある者、権力を持つ者がリーダーだと思っています。しかし、イエス様は、リーダーを地位ある者や権力者から探さなかつたのです。むしろ、リーダーは僕のように、仕える者がなると言われました。

公生涯の間、仕えの手本を見せられたイエス様は、最後にはすべての人の罪を贖うために自分の命まで差し出してくださいました。これは、何にも比較できない崇高で偉大な仕えであり、犠牲です。仕えの核心は言葉ではなく行いにあります。このように仕えが実践につながるとき、神様を喜ばせる路となり、人の心を動かす、すばらしい影響力を発揮することになるのです。†

## \* 私の人生、私の証

ユン・チヨン 牧師／シドニーアノインティング (anointing) 教会、キングダムアライアンス (Kingdom Alliance) の働き

## 刑務所という訓練所



刑が確定されると拘置所から刑務所へ移送されますが、刑務所という所は人が動物へと変わっていく所です。自分だけよく食べて、よく生活して、無事に刑務所から出る、その目標があるだけで、人は徹底的に利己的になります。

私は刑務所へ移送された後、毎日緊張感の中、聖書を読みながら静かに過ごしていました。そんなある日、イスラム教徒の受刑者が近づいてきて、私に質問してきました。「イエス・キリストとは誰だ？」その質問の意図はわかつっていましたが、私はわざと知らないふりをしながら明るい顔で「イエスは預言者だ」と答えました。すると、相手がますます声を荒立てながら、同じ質問を繰り返しました。その度、私は様々な答えをしました。「良い師

匠だ、最高の友達だ」など。すると突然、彼は質問を変えました。「イエスは神様なのか？」。もう避けられない状態となっていました。彼が質問している間、大勢のイスラム教徒に包囲されていました。しかし、私は堂々と答えました。「イエスは神様だ！」

そう言ったとたん、彼は力一杯私を押し付け、暴力をふるいました。私は彼を落ち着かせようとしましたが、暴行と暴言は続き、私は部屋の角に追い込まれました。

その時、聖霊様が働かれたのです。恐怖ではなく、大胆な勇気が湧き上がり、私が出せる一番大きな声で、「イエスは神様だ」と全身で叫びました。

すると、刑務所で一番喧嘩が強くて体格が大きい、顔はまるでライオンのようなイスラム教徒の友人が私に近づいてきました。その友人は数日の間に親しくなったのですが、彼が真ん中に入ってきて、私にアドバイスしました。「誰かから宗教の話をされたら、君はすぐ避けて」。私は彼に言いました。「私は主を裏切ることはできない。主は私を今まで裏切ったことがないのに、どうやって…私はできない」と。その友人は私の話を聞いて驚きながら、「それでは、あなたは死にますよ」と言いました。そんな彼に、「死んでもいい」と答えました。その時は、彼は私を騒動の中からこっそりと連れ出してくれました。

その日の夜、祈る時、主から「息子よ、本当にありがとう」と言われて、涙が止めどなく流れてきました。全面的な聖霊様の助けて大胆になただけで、私がやったことは何もなかったので、涙がこぼれたのです。

### ヨセフのように

数日後のことです。突然、私はAエリアからEエリアへ移されました。最初はAエリアに入り、徐々にB、C、D順に移され、出

所する頃にはEエリアへ行くのが通常ですが、なぜか急に移されたのです。

後から聞いた話では、「8人のイスラム教徒があなたを殺そうと決断し、準備していた。ところが、あなたは急に消えた」との話でした。急にEエリアへ移された理由は神様の守りでした。そのため、「主から頂いた使命があると、神様の時が来るまでは絶対死がない」ということを悟りました。

受刑者にとって最も好ましい場所は食堂ですが、私はEエリアで食堂の仕事を引き受けすることになりました。この食堂で作られた弁当がNSW州の全ての刑務所に配送されるので、その物量はものすごく多かったです。

食堂の仕事の中で何より大変なことは、数千人の食事を正確に同じ量で分けて配ることです。食事担当の受刑者が配る食事は、量がバラバラで教官達が困っていましたが、私はそれを完璧に全うしたので、とても有望な働き手となりました。私が食堂で働いてから、受刑者達が食料品を盗むことが徐々に減っていきました。

人々が変わり始め、食堂も完全に変わっていきました。秩序ができ、食堂が神様の御国となったのです。この変化に感動した教官が、1年後国外追放されてしまう私のために、丁寧な嘆願書を書いてくれました。「英語もあまりできない韓国人が、信じられないほどのリーダーシップを發揮し、私たちの中に平和が訪れた。この人は、オーストラリアに残るべき人だ」と。

刑務所内での日々は、素晴らしいことが連続で起きる毎日でした。その中でも私にとって最も大きい出来事があります。それは、神様の刑務所での訓練を通して、私の中にある愛と感情ではなく、神様のアガペー、神様の愛だけで生きるようになったことです。私は望んでいない方向へ導かれた人生を、聖霊様により生きるようにしてくださったのです。

## 刑務所内で起きた癒しの御業

刑務所の内では、絶対無料ということはありません。ギブ・アンド・テイクがあるだけです。そのためか、飴一つあげるだけでも受刑者は感動します。彼らに条件なしでおやつなどを分かち合うと、どんなに喜ぶのか、まるで幼い子供のように喜びます。イエス様と共に食事をし、恵みを受けた徴税人と遊女のように、小さなものに感動する毎日を経験しました。刑務所で作られた愛の共同体の中で、素晴らしい様々な神様の御業が起こりました。

その反面、私はまだ神様に拗ねていました。神様が私の出所を塞いでいると思ったからです。出所のために祈るたび、「主よ、私を通して、あなたの御心通りに成し遂げてください」と、私の意図しない祈りだけが出てきて、私は自分のための祈りをやめました。

しかし、その代わりに、沢山の癒しの御業が起こりはじめました。刑務所で第一人者であるライオンのような頭の友人が怪我したことがありました。鉄工の仕事をする時、怪我で手が全く動かなくなってしまったのです。彼は私に手を出しながら「あなたが神様の眞のしもべなら、治るように祈ってくれ」と言いました。どんなだけ震えたことか。私は「神様、今すごく困難な状況です。友人の手が治らないと、これから刑務所生活は辛くなります。どうか友人の手を癒してください」と切に祈りました。祈りを終えた瞬間、彼の手に癒しの御業が起こりました。

その日から、「ユンが私の手を治した。彼は本物の牧会者であり預言者だ」と彼があちらこちら言って回ったせいで、私のもとには調子が悪い人たちが集まりはじめました。神様は次々に私を通して、素晴らしい御業を起こされました。手で触れるだけでも癒されたり、更にはキックボクシング選手の足の骨折さえ、主の御名で命じて起きなさいと宣言すると癒されたり、様々な主の恵

みを経験するようにしてくださいました。刑務所内で行われた祈り、聖書勉強、癒しの御業、そして盜難は消え、お互に必要とするものを共有しあうネットワークが作られました。皆で心一つとなって経験した様々な出来事を通して、神様から教わったことがあります。神様の完全な愛だけが、神様の御国をもたらすということです。刑務所生活が始まった頃、「あなたに教えたいことがある。」と言われたことがあります、その教えというのは神様の御国に関するものだと、刑務所から出所する時に悟りました。

いよいよ出所する日、受刑者達と一つの約束をしました。刑務所の中には、中国や南アフリカ共和国など薬物関連で空港から捕まってきた若い人が多いのですが、彼らは面会に来る人がなく、深い孤独を感じていました。刑務所では、おそらく面会者が最も多かった人は私でしょう。面会を受けたこともない人達が、自然に私の目に入ってきたので、彼らと約束をしたのです。「出所すると、君たちに面会に来るよ」

彼らは私の話を全く信じていなかったのですが、私はこの約束を徹底的に守りました。出所してすぐ次の日から面会に行き、中国宣教へ行くまでは週2回、必ず面会に行きました。私の面会を受けた人々が、どれだけ喜んでいたのかわかりません。

私はこの時のこと振り返り、周りの人たちに、「アフター＆サービスが重要だ」と常に言ってきました。イエス様も復活昇天された後、私たちのために絶えずとりなし祈りをしてくださっています。主の愛は世界の終わりまで続くのです。

### 空っぽの冷蔵庫、空っぽの通帳残高

刑務所で様々な恵みを経験して出所した後、家に帰って直面した現実は、空っぽの冷蔵庫と空っぽの通帳残高でした。出所してからすぐ、今まで私と私の家族の世話をしてくれた伝道師さんを

家に招きたかったですが、妻から「おもてなしできるものが家には一つもありません」と言われました。朝ベッドの上で生まれて初めて「神様、私にお金を与えてください」との祈りをささげました。それほど切迫していたのです。

その日、刑務所で一緒に聖書勉強をした‘ナンバー4’という仲間から連絡がきました。私より3ヶ月程度先に出所した彼は、安定した職場で誠実な会社員となっていました。彼と会いレストランへ行くと、彼から「ウン、お金が必要じゃない？」と聞かれました。私は正直に「うん、必要だ」と答えました。彼の通帳残高は600ドルでしたが、彼から半分、分けようと提案されました。しかし、彼が家に来てからは話が変わり「ウン、君には家族がいるから、400ドルあげる」と言われました。

経済的に助けられ、お陰で伝道師さんを食事に招待することもできました。主は、「あなたの朝の祈りを私が聞いた」と言われました。この言葉を聞いた私は、「今後、飢え死することはない」という信仰を持つようになりました。イエス様が公生涯で40日間の断食をした後、サタンから食べ物で試みを受けたことを思い出しました。神様の子供として働くときに何を食べようか、何を着ようか思い悩むなど、主の御言葉が現実として近づいてきました。

一方、私には一つの悩みがありました。刑務所生活によるトラウマです。出所してからもじっとしていられませんでした。動かないと不安、情緒的に不安定、そしてパニック障害、閉所恐怖症があり、眠る前に窓を開けて風を感じないと不安でした。実は、出所して17年が経った今でもドアを閉めて眠ることは、私にとって大変なことです。

牧師按手を受けた日のことです。私はまた別の神様の恵みを経験しました。按手を受ける前に10分程準備の祈りを捧げた時、突然、感涙てしまいました。私が今まで歩んできた人生を神様

から見せられて、3時間以上泣きました。

そして、按手を受ける瞬間、私の耳元に「シュー」とまるで火が消えるような音が聞こえました。私の中に潜んでいた悔しさや怒りの炎が消えさり、その後やっと安心感が訪れました。

私たちの人生は、まるでカヌーに乗ってパドルを操るのと同じです。カヌーの場合、パドルを漕いだら前に進むのではなく、後ろへ進んでいきます。このように、私達が生きてきた過去は全部見えても、背中の後ろにある未来は見ることができません。それでも、絶えずパドルを漕かなければならないし、進まなければなりません。私は刑務所にいる時に未来が見えなくて、狂いそうでした。神様の御前で、「もう私の人生は終わりました」と叫ぶことも多くありました。

しかし、過去を振り返ってみて、今までのために働いた主の御業を悟りました。私のために過去に働いた神様を覚えて信じて、現在も働いている神様への信仰を土台に、未来にも神様がよい働きをしてくださると確信すること、そうすれば力を得られます。これを悟ったため、私は人生のカヌーのパドルを漕いでいるのです。この確信を逃さなければ、絶対に失敗はありません。

聖書は過去のことが書かれています。私たちはその聖書を通して力が得て、現在も未来も神様が働かれる確信し、信仰の道を歩むことができます。

私が信仰を持って、不確実な未来へと、信仰のパドルを漕いで行く時、全く考えもしなかった「中国宣教」という新しいキーワードが神様から与えられました。そして、新しく始まった中国での働きは、辛かった刑務所での訓練が現実世界に適用できた、主の素晴らしい御業を味わい経験する時間となりました。†

(まとめ/イ・ヨンヒ記者)

## \*企画 | 私たちの内に礼拝に対する渴きがあるのか

チョ・ギュウナム 牧師／ウリン福祉財団代表理事、キリスト文化評論家（コラムリスト）

## 変異ディアスボラ時代の靈的訓練



教会は祝祭の場になるべきです。苦痛にさいなまれた人たちが罪の囚われから解放されて自由を歌い、暗闇に閉じ込められた人たちが真理の光の前に出て、神の慈しみをたたえながら喜ぶ声が響き渡らなければなりません。子どもたちは教会学校で一日中讃美歌を口ずさみ、聖歌隊の練習室からは聖歌隊員の歌声が聞こえます。大人たちはニコニコしながら、礼拝堂のあちこちで三々五々グループになり、自分が受けた恵みを証します。リバイバル聖会では恵みの御言葉を熱心に慕い求めながら、ときめきと期待

感をもって互いに愛のまなざしを交わします。これは韓国教会がリバイバルした時の様子です。いつも教会は宴会のようでした。

しかし現在の教会の様子は、まるで葬儀場のような静けさに包まれています。コロナウイルス感染防止で集まれないせいかもしれません、実はコロナウイルス以前から韓国教会は祝祭の場ではなく、葬儀場のように変りつつありました。

まず子どもたちの笑い声が消えました。その理由は、子どもたちが主日学校に集まれないからです。ただでさえなかなか集まらないのに、コロナウイルスでますます集まらなくなりました。さらに韓国の出産率が低下し、児童数が激減して廃校や統廃合する学校が、田舎だけでなく都心でも発生しています。まして教会は言うまでもありません。信仰を伝授すべき次世代の子どもたちがいないのです。

### 鎌びた剣の刃のように鈍くなった私たちの信仰

今や、韓国教会が抱えている悩みと解決すべき課題は、韓国教会に限らず、韓国社会全体の問題であり、現在、パンデミック下の地球の全人類が抱えている問題です。人と人とのソーシャルディスタンスが強調されるなか、私たちは体だけでなく心も離れつつあります。隣人と共に生きていくべき社会生活は、正常ではない独りぼっちを強要し、人間はより徹底的に個人主義的利己主義者に転落しています。これが今や、私たちが置かれている現状です。

「ある人々のように、一緒に集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」(ヘブル10:25) しかし私たちは、最近、集会を止めてきました。主日礼拝以外にも水曜礼拝、金曜徹夜礼拝、早天祈祷、多様な礼拝と集会がありました。でも今は



縮小され、主日礼拝だけを維持する教会も多いです。実際このような現象は、コロナが広がる前から始まっていました。だからコロナのせいではありません。今回のコロナウイルスによって、その現象が顕著に表面化しただけなのです。

正直、この期間、私たちの信仰生活は怠惰になりました。靈的にも鎌びた剣の刃のように鈍って、靈的戦いに敗北しても当然のように受け止めています。初めて信仰を持った時の純粋な情熱が冷めた後、自分の内に新しいリバイバルは訪れませんでした。私自身、回復への渴望さえなく、主日堅守の概念自体が、律法的に自分を束縛するようで嫌でした。そして自然に、コロナウイルス感染防止によるオンライン非対面礼拝が始まりました。

もはや葛藤もなく、自分の好きな方法で礼拝をささげるようになりました。誰の顔色を伺うこともなく、自分の自由意志による選択で信仰生活をすればよいのです。しかし問題は「私のやり方ですればいい」ではなく「やってみたがうまくいかない」です。信仰生活がますます怠惰になっていくなか、自分の信仰は底をついているからです。今やこれが、私の靈的状態の本当の姿なのです。

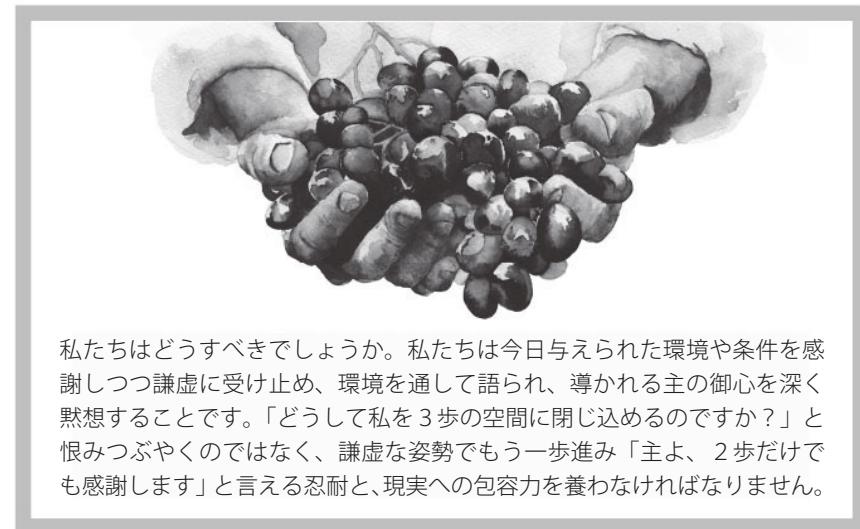
なぜこのような問題が生じるのでしょうか。人間の自由意志は、自ら信頼できるものではないからです。人間は自律的ですが、その自律性を自己統制できるまでは、非自律的な拘束と統制を徹底的に受けなければなりません。そのなかで世的な自由を自ら返上し、真理の自由を探し求めなければなりません。真理のために自ら探し求める拘束は恵みによる自由であり、この恵みは徹底して律法の枠内で与えられることを知らなければなりません。律法の外には恵みはありません。律法に縛られ、律法の束縛を体験してこそ、恵みの喜びを味わうことができるのです。

ルーマニアのリチャード・ウォンブラン牧師は、3歩しか動けない地下の狭い牢屋に閉じ込められた時、彼は自ら行動範囲を2歩以内に決め、苦痛を与える者たちに言いました。「あなたたちは私を3歩の空間に閉じましたが、私は2歩で十分なので神様に感謝しています。私の行動範囲を決めるのは、あなたたちではなく、私なのです。」

それでは、私たちはどうすべきでしょうか。私たちは今日与えられた環境や条件を感謝しつつ謙虚に受け止め、環境を通して語られ、導かれる主の御心を深く黙想することです。「どうして私を3歩の空間に閉じ込めるのですか？」と恨みつぶやくのではなく、謙虚な姿勢でもう一歩進み「主よ、2歩だけでも感謝します」と言える忍耐と、現実への包容力を養わなければなりません。今、私たちが経験している苦痛は、私たちに限ったものではありません。史上類例のない、全世界が共通に経験する「世紀末の全世界的な災難」だからです。

### 実践的な靈的訓練が必要

次に、実践的な靈的訓練が必要です。時代の変化を予測しながら、全体主義から個人主義に変っていく今後の時流の中で、教会



私たちはどうすべきでしょうか。私たちは今日与えられた環境や条件を感謝しつつ謙虚に受け止め、環境を通して語られ、導かれる主の御心を深く黙想することです。「どうして私を3歩の空間に閉じ込めるのですか？」と恨みつぶやくのではなく、謙虚な姿勢でもう一歩進み「主よ、2歩だけでも感謝します」と言える忍耐と、現実への包容力を養わなければなりません。

を含めたすべての宗教は、組織体ではなく、無形の個人的集合体として動いていくことを想定し、準備しなければなりません。その準備のための靈的訓練は、個人の靈性を自ら管理して守る黙想訓練の強化です。そしてこの黙想は、社交に陥らないよう徹底して御言葉と祈りの中で行ない、何よりも私たちの実生活の現場で行なわれるべきだということを前提にします。

押し寄せた迫害によりエルサレム教会が離散し、ディアスpora (diaspora) 時代が始まりました。皮肉なことに教会史の研究者は、これによってアジア宣教の門が大きく開かれたと言います。現在の教会も、コロナウイルスの反乱と攻撃で散らばり、変異ウイルスによって変異ディアスporaが形成されています。「集まれば死に、散らばれば生きる！」コロナウイルスが作り出した新しいスローガンです。教会も同じです。集まるに熱心になるべき教会が、もはや集会の性格を変えざるを得ない時に来ています。迫害時の北朝鮮や中国の家庭教会のように、あらゆる迫害に

耐え忍べる個人の靈性訓練が重要になります。個人の靈性には、あたかも砂漠の教父たちのように「神の前での単独者」として默想訓練を行ない、孤独な自分と靈的に戦うことを必要とします。

これからは、集まって何かをするより、散らばって個別作業により完成度を高めるようになるでしょう。A I 時代には人間関係重視より、成果や効果重視で進んでいくはずだからです。牧会の宣教方法もやはり、「来てください」と言うより、尋ねて行かなければなりません。家を訪問するのではなく、心で会いに行くのです。集団で教えようとするより、個人的な交わりを通して一人の魂をケアする『靈的ケア (spiritual care)』が必要です。S N S が高度に発達した現代では、非対面でも十分に可能です。場合によっては、集団や対面よりもっと効率的で繊細な心の交流が可能になります。

世界はますます個別化しつつあるため、一人の魂に対する個人的なケアが切実に求められています。集団化ではなく、個人的な靈性を強化させる訓練が必要であり、これに対するネットワークも必要です。ある組織体に依存するより、個人的な默想をもって神の御前に出ていけるように靈的自己管理をし、教会はこれを支えなければなりません。今や私たちの靈的戦いは、各自が置かれた生活現場で必死の戦闘をしなければならない時代を迎えていきます。

教会は人間から空虚と疎外感を取り除き、世が与えることのできない感性と理性が調和した靈性を提供し、人間の魂を目覚めさせる働きをしなければなりません。人間が自ら求めなければ与えられない、神様がなさらなければできない、そして人間に絶対的必要を感じさせる、靈的渴きを満たしてあげなければなりません。人間関係が失われつつある現代人に、十字架の愛で救いの橋を架けることこそが、教会の時代的使命であり役割です。†

\* レビ記ライフ | カン・デヴィ 牧師／ハンセサラム教会担任牧師

## 「そして彼は呼んだ」

(ヴァイクラー *אַקְרֵי*)



「主はモーセを呼び、会見の幕屋からこれに告げて言われた。」  
(レビ記 1:1)

レビ記の本来の書名はレビ記ではなく、「そして彼（主）は呼んだ」です。ヘブル人たちではなくギリシャ語で翻訳されたブルガタ聖書に、「レビティコン ( $\Lambda \epsilon \nu \iota \tau \iota \kappa \circ \nu$ )」という関係のない名前が付きました。それを英語で「Book of Leviticus」と訳し、さらに韓国語で「レヴィギ」と訳された最高に面白くない名前です。ちなみに、この書名と内容は全く関係がありません。なぜなら、レビ記にはレビ人に関する内容がないからです。敢えて探すなら、25章に一度出てくるだけです。レビ記が退屈で難しい書簡だというのは、書名のせいもあるでしょう。

ユダヤ人たちは、聖書の中でレビ記を最も格別に思い大事にします。彼らが子どもたちに一番最初に読ませて教える御言葉は、レビ記です。なぜなら、聖書の66巻全体で、神が直接語られた御言葉の純度が最も高いからです。レビ記の約90%は神が直接語られた御言葉です。またレビ記は生活に関することです。私たちがこの地で、いかにして神の国を生きていくかについて、その方法を教えるものです。レビ記は、私たちの生活のすべての部分がいかに神とつながっているかを見せてくれます。礼拝、食生活、永生、衣服、住居に関するすべてのものを通して、その方の生き方を、生きていく道を開いてくださるので、昔からユダヤ人たちは最も重要で優先する御言葉として受けとめました。

ヘブル的観点から、すべてのものにおいて最も大事なものは中央に配置します。そして、残りがそのセンターの両脇を囲みながら、その核を近くで取り囲む構造を持ちます。レビ記はモーゼ五書と呼ばれる『トーラー』の真ん中に位置しています。最も重要な奥義がここに集約されているからです。

### 「会見の幕屋」で呼ばれる

再び書名の話に戻ります。「ヴァイクラー *וְיַעֲלֵה*」は、聖書の中で最も素晴らしい名前です。「ヴァイクラー（そして彼が呼ばれた）」——どれほど文学的で意味深長な名前でしょうか。もしも、現在私たちの聖書のレビ記をこの名前で呼ぶようになると、聖書を読む人たちの注目度は一段と高まるでしょう。

書名について詳しく調べてみると、『そして』という言葉がとても重要になります。これは、出エジプトしたイスラエルの民が荒野で幕屋を完成した出来事とつながります。それゆえ、レビ記は「幕屋」という空間を常に念頭におかなければなりません。エジプトの奴隸であったヘブル人たちは、エジプトを脱出して荒野

で幕屋を完成します。これが出エジプト記の結末の物語です。レビ記は、その幕屋に神が臨在され、彼らを呼ばれる物語です。ところが、レビ記1章1節において、神は「幕屋」ではなく、「会見の幕屋」で呼ばれます。「会見の幕屋（オーヘル・モエド）」とは、「出会いの天幕」あるいは「約束の天幕」として解釈されます。聖書で「天幕に入る」という表現は、イサクがリベカを花嫁として迎える話に出てきます。

「イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとて妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た。」（創世記24:67）

神が会見の幕屋で呼ばれるとは、親密な出会い、つまり花婿が花嫁を呼ぶ婚姻関係とつながります。それゆえレビ記の御言葉は、小さな素朴な部屋から聞こえる愛の言葉のような御言葉です。経典のように固い話ではなく、生活現場で生きておられる神の言葉がすなわち、「会見の幕屋」の話なのです。

幕屋は私たちの身体に比喩されますが、コリント人への第二手紙5章にこのような御言葉あります。

「この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである。」（第二コリント5:4）

幕屋で神に会うということは、私たちの人生の上にその方を「着ようとする」ことです。単なるミーティングではなく、「合一、一致」の出会いがなされることです。主は、このために私たちを呼んでおられるのです。レビ記は、召し——コーリング——の御言葉です。このコーリングは、私たちの生活の場と姿を変えるこ

とを要求します。自分がいる場所から立って神の近くに進み出ること、これが召された私たちの使命です。

1990年代の宣教集会や礼拝の後半には、必ず『コーリング』の時間がありました。牧師先生が「今、主の尊い働き手として、宣教師として、使役者としてお召しを受けた方がいますか?」——しばしの静けさが緊張感に変わりはじめる頃、ひとりの人が立って講壇のほうへ向かいます。その後も召しを受けた聖徒たちが続いて講壇に登り、全聖徒が共に彼らのために祈った後、「派遣」の賛美を歌いながら涙を流した記憶があります。

レビ記は古代ヘブルのレビ人たちの規定ではなく、今私の人生と肉の天幕に臨在されて私を呼んでおられる、『神のコーリング』なのです。召しを受けた者たちが、いかにそれに応答し生きていくかについて、レビ記の生贊の捧げ方や生活に関する掲示の中に詳細な内容が盛り込まれています。私たちの衣食住にまつわる生活と神の聖さが、どのようにつながり調和をなしていくかについて示したものが、レビ記の御言葉です。だからこの御言葉はダイナミックなのです。

### 御言葉は蜜のように甘い

だけど、ユダヤ人たちはいかにして面白くもないこの御言葉を、5歳余りのこどもに教えるのでしょうか。ダビデとゴリアテ、サムソンとデリラの物語から始めた方がはるかに効果的ではないでしょうか。しかし、ユダヤ人たちは最も面白くないものから教えるのです。

間違えば聖書全体が面白くない、退屈なものとして核印されかねません。しかし秘法は他でもなく、レビ記の御言葉に蜜を塗ることにありました。

実際に、ユダヤ人たちは子どもが御言葉を読み始めると、その



ユダヤ人たちは子どもが御言葉を読み始めると、その御言葉を書いた紙の端に予め蜜を塗っておき、それを舌の先で味わうようにします。『御言葉は蜜のように甘い』ということを教える、実に共感覚的な教育です。幼い時から最も甘い感覚として刻み込まれた御言葉は、いつしか時がくればその子どもを感動させます。御言葉は生きて働くのです。

御言葉を書いた紙の端に予め蜜を塗っておき、それを舌の先で味わうようにします。『御言葉は蜜のように甘い』ということを教える、実に共感覚的な教育です。幼い時から最も甘い感覚として刻み込まれた御言葉は、いつしか時がくればその子どもを感動させます。御言葉は生きて働くのです。ひとりの人の生活と日常を変え、人生を変えられます。そして、それはこの世を変化させます。これが、私たちがレビ記を読み、レビ記を生きていかなければならぬ理由です。レビ記を通して私たちの礼拝と祭壇が回復し、衣食住のすべての生活が礼拝となる変化が引き起ることを願います。

個人的には何年も前から、レビ記に蜜を塗りたいという想いでいっぱいでした。私が一番好きなレビ記の御言葉を、子どもたちに面白く伝えられたらどんなにいいかと思いました。<信仰界>にレビ記に関する記事を連載する機会を与えてくださったのは、「レビ記に蜜を塗りなさい」という主のお召しであると信じます。蜜のような『レビ記ライフ』が繰り広げられることを切に願います。†

## 誘惑と試練に打ち勝つ秘訣



中国の四字熟語の中に「螳螂在後」という言葉がある。「ウ」という人が朝、庭に出ると、高い木の枝でセミが鳴いていたが、その背後にはセミを食らおうとするカマキリが微動だにせずにいたといいます。

しかし、カマキリはセミだけを見ていたため、背後に自らを食らおうとする雀を見ることはできませんでした。さらにこの「ウ」という人も、そのカマキリを矢で射抜こうと狙っていたら、自分の目の前の水溜りにはまって濡れてしまった。全体を見れば自分の目の前にある一部分だけにとらわれて生きていると、自らの人生や命を失いかねないという教訓です。

### どう反応すべきか

人は誰でも肉体を纏っているがゆえに、様々な試練や誘惑に陥ります。誘惑と試練がもつ残酷で破壊的な力を身に染みて感じた経験を持つ私は、知性的に鋭かった20代に神学を勉強し、この2つの単語、誘惑と試練の違いを自分なりにまとめてみました。

まず誘惑とは、①サタンと悪魔によるもので ②人の欲求を利用し ③罪を犯させ ④罪悪感により病ませ ⑤結果、神様の使命から離れて死をむかえさせることです。

次に試練とは、①神様が備えられたもので ②人のか弱さを点検され ③訓練と鍛錬を通して ④強い兵士として勝利させ ⑤結果、神様の使命を成し遂げ命を得させることです。すなわち、誘惑と試練は似ているように思えますが、出発と過程、結果、および目的が全く異なるということができるでしょう。

私は30代に教会を開拓し、その後現在に至るまで牧会をし、その経験を通じて、より深く御言葉を研究し、多様な人々と出会ってきました。彼らの魂に関わり、助け、祈り、その生活の中で実質的な悟りを得ました。

結論から言えば、誘惑と試練はそれ自体が違うものではなく、それを反応し担う人によって異なるということです。すなわち、いくらサタンが一つの魂を破壊しようと誘惑したとしても、その人が誘惑に勝てば、それは偉大な経験となり、神様がいくら一つの魂を成長させようと試練を備えられても、その人がその試練を乗り越えられなければ、それは致命的な危機になり得るのです。

### 神様の視線

しかしそれは、人によって誘惑や試練への対応が異なって良いということではありません。単純に「私に誘惑や試練が来ても、私は打ち勝つ」という態度や心構えより、もっと大切なものがあるのです。それは私たちがすべての誘惑と試練に勝たれた我が主、イエス様の道を見つけその道を歩むことです。それにより、この誘惑と試練だけをみる狭い視野を広げ、それを通して神様が期待される大きな絵を見るすることができます。

荒野にて断食をしていたイエス様が、サタンの三つの誘惑に勝たれたのは、単に旧約聖書の御言葉を上手に引用されたということではありません（サタンも御言葉を引用しました）。イエス様は聖霊様の助けにより、より広い視野をお持ちであったのです。

腹が減っているものにはパンが必要であるが、そのパンだけでは生きていくことはできないと言われました。また、サタンを拝むことで天下の全ての栄光を受け取るという結果に捉われるのではなく、その過程として十字架が必要であると知っておられたため、断固としてその誘惑を断られました。また高いところから飛び降り、人々にショーケースを見せるという行いで有名になることが重要ではなく、父なる神様が自身に下さった使命を成すことがより尊いということを確信し知っておられたのです。

結果、私たちが着実に礼拝に参加し、御言葉を読み、お祈りをする理由は、私たちが自らの欲望という小さい視野を広げ、神様の広い視野を持つためなのです。今までの苦しかった各自の人生を振り返ってみましょう。

その場限りの衝動により必要なないものを買い、その場限りの欲望により見てはならないものを見ました。少し我慢すれば抑えることのできた怒りによって周囲を傷つける言葉を吐き、樂をしようと近道をして大きな代償を払いました。もし、その時に神様の各自の人生に向けられた大きく広い視野を持っていたらば、

私たちはその誘惑と試練に悠々と打ち勝ったはずです。若き頃、とても好きだった女性が一人いました。その彼女も私を好いてくれていました。そして私は彼女の親に会い、交際と結婚の許しをもらいたかったのです。しかし、その彼女の親は「蛙の子は蛙」と言いました。私の父は牧会者であったが離婚し失敗したため、私もやはりそうなることが運命であるかのような烙印を押されました。

私のことはほとんど何も知らないのに、ただ私の父をみて判断しました。私は仕方なく諦めるしかありませんでした。すると、その彼女はこんな提案をしました。自分と一緒にモーテルに行こうと言うのです。そうすれば親も否応無く承諾するはずだということです。私はそのとき、とても心が揺れました。私もその時は燃えるような欲望を持つ20代だったからです。しかし、私は断りました。そして結果、別れることになったのです。

ある日、親しい友人に聞かれました。「なぜその時断ったのか」と。私は答えて言いました。「私もとてもつらかった。しかしその瞬間、神様は私が遠い未来に出会う私の子供の顔を見てくれた。そして私が遠い未来に教授や牧会者なり、出会う弟子たち生徒たちの顔を見てくれた。何より私が遠い未来に天国の門の前で出会う、イエス様の顔を見てくれた」と。

友人は無言で明るい顔を浮かべ涙を流しました。私も共に喜び泣きました。†



---

イエス院第四の川 (The Fourth River) プロジェクト  
統一時代を開く

ベン・トレイ イエス院理事長・サンスリヨンセンター本部長



## 預言の目的

昨年の7月から11月にかけて「峻別と預言」について連載しました。預言が与えられた時、それを峻別することはいかに重要であるか、また峻別の過程における預言の重要性を述べました。預言は峻別的一部分であり、わきまえるべき対象でもあります。人々を励まし、悔い改めを呼び覚まし、ある行動や準備に参加するように呼び掛けるような預言の別の目的についても、ある程度述べました。

このような預言の目的や側面を理解するのは難しくありません。しかし、預言のまた別の目的もありますが、おそらくこれが最も重要であると思われます。それは、祈りをもって神の意図が成し遂げられるよう、人々に神の意図を伝えることなのです。そこでこそ、彼らは祈りをもってそれを成し遂げることができるのです。今回は、この部分についてもっと研究してみたいと思います。この部分をよりよく理解するため、旧約に記された二つの逸話を見てみましょう。一つは預言者ヨナであり、もう一つは預言者エリシヤとイスラエルの王ヨアシの対話です。

まず、預言者ヨナについて見てみましょう。しぶしぶ預言者に

なった人がいるとすれば、それはヨナです。神は、彼にアッシリヤの首都ニネベの人たちの悪が神の御前に上がってきたと言われ（ヨナ書1:2）、そちらへ行くようお命じになりました。

しかし、ヨナはどうしましたか。彼は立ってタルシシ行きの船に乗り、反対の方に向かいました。ニネベは東の方へ非常に遠く離れた都市です。陸地旅行をしなければならないところでした。反面、タルシシは地中海を渡って西の方へ遠く離れていました。以来、彼にどういうことが起こったのかは、よく知られています。

船を脅かす暴風が襲いました。船員たちは恐れました。彼らは、船に乗った誰かが神の怒りを買ったに違いない、と強く疑いました。それでくじを引き、そのくじはヨナに当たりました。ヨナは、『これは神の御心に従ってなされたことだ』と認め、自分を海に投げ入れなさいと言いました。彼らは、初めはこれを拒み、船の安全のために彼らの知っているあらゆる方法を試しましたが、すべてが無駄なことでした。

彼らは遂に、ヨナを海に投げ入れました。すると、暴風は直ちに止みました。そして、ヨナは大きな魚にのまれました。彼は魚の腹の中から神に叫びました。神はその祈りを聞かれ、魚が彼を陸地に吐き出すようにされました。ヨナは、すでに神に聞き従う準備ができていました。神は、彼にニネベに行って彼らに対する神のメッセージを伝えなさいとお命じになりました。ヨナはニネベに行き、預言をしたのです。神が彼に与えた御言葉は確かなものでしたし、絶対的なもののように見えました。

「四十日を経たらニネベは滅びる」——いかなる条件、いかなる可能性も、これを覆すことは不可能のように見えました。この御言葉は警告として与えられたものではありません。これは予定されたものでした。ヨナは、『悔い改めないならば、この都市は滅びる』とは叫びませんでした。ただ「ニネベは滅びる」とだけ

叫びました。ところが、人々をはじめ王までも心に刺さるものがありました。彼らはみな断食し悔い改めました。そして、神の御心が変わったのです。

では、ヨナは起こり得ないことを預言した、失敗した預言者だったのでしょうか。そうではありません。ヨナは正確に、神がヨナに仰せになった通り明確に伝えましたし、実際に、神が望んだ通りの効果をもたらしました。神は、ニネベの人たちが悔い改めて立ち帰ることを願っておられました。ニネベの人たちがそのようにしたとき、もはや神にはその都市を滅ぼす理由がありませんでした。ヨナにメッセージを託された意図は、人々がそれを聞き、神の御心に従って祈ることでした。悔い改めて立ち帰ることだったのです。そのメッセージは人々の心を動かしました。彼らは神に叫びました。そして、神は彼らを生かされたのです。

## 預言的行動

預言者エリシャの話に行ってみましょう。列王記下 13 章 14 節からこの話が始まります。エリシャは死に近づいています。スリヤの人々によってイスラエルが牛耳られるなか、靈的な父エリシャが死ぬ病気に罹り絶望的な状況にある中、イスラエルの王ヨアシがエリシャのところに来ます。エリシャは彼に、預言的行動をしなさいと命じ、そのことにあざかります。彼はヨアシ王に、弓を取ってスリヤに向かって東の方へと射なさいと言います。

『「東向きの窓をあけなさい」と言ったので、それをあけると、エリシャはまた「射なさい」と言った。彼が射ると、エリシャは言った、「主の救の矢、スリヤに対する救の矢。あなたはアペクでスリヤびとを擊ち破り、彼らを滅ぼしつくすであろう」』(列王記下 13:17)。「あなたはアペクでスリヤびとを擊ち破り、彼らを滅ぼしつくすであろう」——明確な解釈のある預言的行動でし

た。神の民イスラエルを抑圧したスリヤ人を完全に滅ぼし尽くすこと、これが確かな神の意図でした。なんと驚くべき御言葉でしょうか。ですから、預言者エリシャはヨアシ王に対し、この預言を確証する別の預言的行動を取りなさいと言ったのです。

『エリシャはまた「矢を取りなさい」と言ったので、それを取った。エリシャはまたイスラエルの王に「それをもって地を射なさい」と言ったので、三度射てやめた。すると神の人は怒って言った、「あなたは五度も六度も射るべきであった。そうしたならば、あなたはスリヤを撃ち破り、それを滅ぼしつくすことができたであろう。しかし今あなたはそうしなかったので、スリヤを撃ち破ることはただ三度だけであろう』(列王記下 13:18 ~ 19)。

予定されたように見える預言の言葉は、実際には神の御旨に従って召された人の行動にかかっていることがわかります。神の意図は、スリヤを滅ぼし、二度とイスラエルを苦しめないようにすることでした。

しかし、この預言の言葉、神の意図を持つメッセージの結果は、ヨアシという人物の行動にかかっていました。それゆえ、個人的な確信の不足、恐れ、情熱の不足など、いかなる理由か正確にはわかりませんが、ヨアシはエリシャが望んだ通りには従順しませんでしたし、神の完全な意図と計画が頓挫する可能性の扉を開いておいたのです。神は、ヨアシ王が統治する間、スリヤを追い払うことにヨアシ王を用いました。同章 25 節には、ヨアシ王はスリヤの王に三度勝ち、スリヤに奪われた都市を取り戻しました。しかし、スリヤは完全には滅びず、今日に至るまで断続的にイスラエルの脅威となっています。(もしヨアシが 5 ~ 6 回地を射たならば! イスラエルと中東にいるクリスチヤンをはじめとする多くの人々の悲しみは、どれほど軽減したことでしょうか!)

## 預言の確証

さあ、現在に戻りましょう。多くの読者は、最近のアメリカの選挙を巡る出来事を知っているはずです。11月3日の選挙以来、多くの言論はバイデンの勝利を宣言し、ドナルド・特朗普大統領はバイデンが票を盗み、途方もない詐欺があったと主張し、選挙結果を認めないと報じました。

その時、特朗普大統領を支持するクリスチャン・リーダーが大勢いました。バイデンの勝利が明白に見えていたにもかかわらず、特朗普が再任するという明確な預言がありました。ほとんどの人が知っているように、いくつかの主要州の選挙結果を巡って長い戦いがありました。最終結果は、1月20日にバイデンが就任しました。ならば、特朗普の勝利を預言した人たちは偽預言者ですか？

その間、高い水準の靈的戦いを経験した親しい友人が一人います。彼は、特朗普が第一期の任期中に神の働きを始め、神の願われるいくつかのことを成就するために、あと4年間大統領の座にいるだろうと預言しました。しかし、聖霊を通して与えられた御言葉は、予定されたように特朗普の勝利に見えても、それは神の切なる御想いだと慎重に話しました。

預言の言葉が与えられる理由は、執り成す者をお召しになり、その戦いに参加し祈らせるためです。彼をはじめ共に祈っていた人たちは、聖霊が悪しき勢力に対抗し働くために道を開くための、強い靈的戦いに参加していることに気づきました。また、特朗普は大統領になれませんでしたが、彼らを含め、すべての人たちの祈りが効果的であったことも確信しました。

昨年8月の私のコラムを覚えているなら、預言を確証するためにはすべき4つの質問を含め、峻別の助けとなる多様な道具があることを知っているはずです。その中の4番目の質問は、『客観的

に検証可能な出来事か、事実が確認できるか？』でした。その間、私の友人をはじめ、共にいた人たちはこの出来事を解釈し、神の御言葉と御旨を分別するために絶えず問い合わせました。

本来の預言の言葉は特朗普が確実に勝つという予測でしたが、当然のように受けとめませんでした。彼らは、それを神の御望みの宣言として受けとめました。他の候補に対するひとりの大統領候補の勝利ではなく、主が大統領職を通して成就することを望まれる特定のことに対するものです。彼らは、それを祈るために召されたのだと受けとめました。私がそうであるように、彼らも祈りの労苦が神の召命に対する従順であり、物理的領域だけでなく、靈的領域においても肯定的な影響を及ぼしたと信じています。時間とともに出来事が展開されるにつれ、この戦いに参加し過ぎ去ったことのすべてを評価するとき、今まで知られていること以上に学ぶことがたくさんあります。

この出来事は、多くの信仰者にとって非常に衝撃的でした。特朗普の勝利を預言した人たちの何人かは、自分が間違っていたことを公式に謝罪しました。反面、ある人たちは、そうではなく、その預言は神の意図であったものの、別の要因のために正確に成就されなかつたのだと言いました。謝罪した人は、預言の本質と目的を完全には理解していなかったのだと思います。彼らは、非常に狭い、ただ予定された方法だけで預言を見ていました。エリシャがヨアシに「矢を地に射なさい」という行動が彼の祈りであったように、預言とはしばしば祈るために召される場合もあるということを悟れなかつたのだと思います。

出来事と預言を黙想するとき、予定と執り成す祈り手としての預言的召命を混同しないように注意しましょう。時には単純な予定の場合もありますが、時には祈りや行動のための召命もあります。この違いを見分けることが重要です。†

---

発行：純福音東京教会 文書宣教会・しなんげ出版部

【翻 訳】：趙 榮珍 執事、李カレン 執事、林 俊秀 教育生、李 珍 執事、金原英興 按手執事、

朴 宰完 按手執事、青年部翻訳チーム、金澤由紀子 助士

【日本語校正】：垣内温子姉妹、篠崎 栄 姉妹、今村和世 執事、吉田綾子 執事、向川 誉 執事、

澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再 編 集】：金澤由紀子 助士

【監 修】：武石哲夫 按手執事

---

愛する者よ。あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく、  
あなたがすべてのことに恵まれ、またすこやかであるようにと、  
わたしは祈っている。(ヨハネ 1:2)

# しなんげ

4  
2021



純福音東京教会 文書宣教会・しなんげ出版部

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church